

研修報告書 No 49

私は地域研修の一ヶ月を、高知県〇〇病院にて過ごした。自分にとって高知県は実家があり、高校時代を過ごした場所なので私にとっては所縁のある地であったが、違った一面を垣間見ることができた。

〇〇町は、四国山地の中央にある人口約 4000 人弱の町である。山間部ではあるが、高速道路のおかげで車があれば高知市内からのアクセスは良く、地理的に横長の高知県の中では意外と便利な場所だと思った。病院の裏に吉野川が流れ、空気が美味しく絵に描いたような田舎風景は地元の方にとっては当たり前のものかもしれないが、心身共に癒されたものである。今年は桜の開花が早かったらしく、研修終了時期には満開の桜も見ることが出来た。

研修の実際は病棟業務を主とし、救急外来、診療所診療、往診診療、転院搬送、整形外科手術など様々なことを経験させてもらった。私の場合、研修初日から入院が入ったり院内急変があったりしたため、行っている医療はどこにいても同じなんだという印象を受けた。肺炎、心不全、尿路感染、脳梗塞、腸閉塞、肝硬変などの common な疾患からフルニエ壊疽、間質性肺炎、多発性骨髄腫など大学病院でも経験した疾患など、一ヶ月間で多くの症例を経験することができた。重症例では非侵襲的陽圧管理を行う例もあり、軽症から高度医療まで行っていた印象が強い。上部消化管穿孔や硬膜外血腫による癲癇、膀胱破裂など外科的処置が必要なものは高知市内の病院に転院搬送となったが、市内へは救急車で 40 分程度であったため不便には感じなかった。さらに急を要する場合や重症例ではドクターヘリが役立った。このような山間部だからこそ、ドクターヘリが有用であることを思い知った。

診療所診療では、病院からさらに山奥の診療所へ出向き実際に診察を行ったが、患者さんはみな優しく、定期受診を心待ちにしている印象も受けた。診療所診療や往診診療で、町民の方が実際に住んでいる家を拝見したが、体力のある自分でも息切れしてしまうような高い場所にあたりしたので驚いた。しかし、住民にとっては長く住む慣れた場所であり、多少の不便は問わないようであった。地域住民と寄り添い住民のトータルヘルスをサポートする家庭医療を垣間見た気がした。

こうして振り返ってみると実に様々な経験をさせてもらったと思う。様々な専門家のいる大学病院とは異なり、実に幅広い知識と経験が必要なのだと思い知った。外来、内視鏡を含む検査を行い様々な疾患に対応できる指導医達の総合力にも驚いたが、自分も広い視野を持ち診療出来るようになりたいと思った。

病院としては小規模であるが、毎月研修医を受け入れているためか、院内スタッフは皆さん気さくで、すぐに打ち解けることが出来た。飲み会が多く、本音で語り合える場があったことも大きかったと思う。皆お酒が強く、本場土佐のおもてなしに初めは少し驚いた

が、楽しかった記憶として残っている。

高度高齢化社会に伴い、若年者の町離れと高齢層の死亡により、人口減少が進んでいることも実感した。しかし人口が減ったからといってもそこに住む住民がいる限りは現地での医療は必須である。課題は多いかもしれないが、今回町の中核病院にて経験したことを、今後の医者人生に活かせればと思っている。